

社長コラム

season5

地球にも家族にも優しい家づくりの工夫

間取りや設備を自由に選び、暮らしに合わせた理想の家を建てることこそ、注文住宅の醍醐味ではないでしょうか。

最近では、ランドリールームやファミリークローゼットといった「動線」を意識した間取りが増え、現代の共働き世代にとって家事のしやすい空間づくりが主流となりました。一方、家事をよりラクにする設備も増え、こちらも大変人気を集めています。

また、太陽の熱や光、風といった自然のエネルギーを上手に取り入れながら快適で省エネな空間づくりも注目されています。

今回は設計段階における間取りや設備のアイデアに注目し、ご家族のライフスタイルを振り返りながら理想の住まいづくりのヒントを見つけていきましょう。

PART1 共働き世代にぴったり! 「家事ラク生活」のススメ①

ここ最近お客様の話を伺っていると、新しい住まいでは「家事」の負担をできる限り減らしたい!、と希望される声が圧倒的に増えています。共働き家庭や、足腰に負担をかけないセカンドライフを求める層にとって、いかに「家事」をラクにできるか、それが家づくりのメインテーマになっているようです。

ところで共働き世帯にとって一日の中で一番の頑張りどころは、仕事が終わって帰宅してからお子さんが寝るまでの時間帯ではないでしょうか。就学前のお子さんがある場合、お迎えも必要ですし、帰宅して夕飯の準備をし、お子さんをお風呂に入れ、皿洗いに洗濯まで、毎日のルーティンワークが山ほどあります。この一番忙しい時間帯をどう効率よく過ごせるかが生活のキーポイントとなります。

そこで「家事ラク生活のススメ」として着目するのは、**【洗濯】** **【皿洗い】** **【買い物】** **【料理】**。家事の中でも手間と時間を容赦無く求められるものです。その厄介な家事を楽にするための設計（間取り）や設備を今回は見ていきましょう。

【洗濯】を楽にする!

洗濯は単に洗うだけでなく、重たい衣服を運び、干して、畳んでしまうところまで一連の作業が必要で、大幅に手間と時間がとられてしまう厄介度No.1の家事です。

ここでまず目をつけるポイントは「**どこで物干しをするのか**」。一般的に物干しはバルコニーやサンルーム、雨の日は仕方がないのでリビングやお風呂で干すというイメージが強いのですが、今はその考えがガラッと変わり、物干しは洗濯機が置いてある「**ランドリールーム**」での「**室内干し**」が基本になりつつあります。

その「室内干し」のための人気設備が次の3つです。

①ホシ姫サマ

まずはパナソニック「室内物干しユニット ホシ姫サマ」。ボタンを使って電動で竿を出し入れできる商品のため、使わないときは収納して空間をスッキリさせることができます。高さも細かく調整できるので干しやすい位置まで竿を下ろしたり、乾かす間は天井の高い位置に移動させて邪魔にならにようにしたり、使い勝手抜群なイチオシ商品です。



PART1 共働き世代にぴったり! 「家事ラク生活」のススメ①

②ホスクリーン

次に紹介するのは川口技研「ホスクリーン」。ホスクリーンは竿や物干しハンガーを吊るすポールが手で取り外しできるため、使わないときには取り外せて邪魔にならず、使うときは誰でも簡単に物干し竿の設置ができます。シンプルなデザインで設置場所の幅も広がり、コストも良心的なことから需要が増えています。



③kacu

3つ目は森田アルミ工業「kacu（カク）」。フレームが25×25mmの角パイプでスタイリッシュなデザインが特徴です。インテリア物干しとしておしゃれな空間づくりまでできてしまいます。部屋に完全固定する商品のため、物干しスペースに余裕がある場合にピッタリです。



PART1 共働き世代にぴったり! 「家事ラク生活」のススメ①

これら「室内部屋干し」の設備（器具）を活用することで、重たい洗濯物を持ってバルコニーまで移動する手間がなくなり一気に重労働から解放されます。

さらに干した後の「収納」をスマートにするポイントはクローゼットの位置です。家族の衣類をまとめて収納できるファミリークロークやウォークインクローゼットなどの収納スペースをランドリールーム周囲に設けたり、ランドリールーム自体の収納スペースを大きく設けるなど、移動距離を短くすることでさらに家事の時短につながります。

ではクローゼットの広さをどう決めればいいのか。家の広さに左右されますが、家族構成や服の量、一日の過ごし方など、それぞれのご家庭の事情に合わせた最適解を見つけましょう。組み合わせのパターンは数えきれないほどありますので、設計の段階でしっかりイメージすることが大切です。

よくあるパターンとして、脱衣所とランドリールームを兼用するケースが多いようです。ランドリールームにカウンターを設け、干した衣類のアイロンがけから畳む作業まで全て一箇所で済ませることができま。す。「室内部屋干し」設備をアイロンがけカウンターの上に設ければ、無駄な面積を省くことができ空間の有効活用にもなります。



このように「洗う・干す・しまう」を同じフロアや動線上に整えることで、洗濯がラクになります。新築の場合、80%以上の方がランドリールームの導入を選ばれています。「家事ラク生活」のヒントにしてください。

PART2 共働き世代にぴったり! 「家事ラク生活」のススメ②

「家事ラク生活のススメ」で次に着目するのは

【皿洗い】を楽にする

共働きだと朝使った食器を家を出るまでに洗う暇なんてない! という方も少なくありません。できることなら朝と晩に使ったすべての食器類を一度に洗浄してしまいたいと思ってしまいます。そんな時、強い味方となるのが**フロントオープン型食洗機**です。

フロントオープン型食洗機

これまでの日本の食洗機は、屈まずに食器を出し入れできる「引き出し型」が主流でした。しかし、引き出し型の食洗機は洗浄ノズルが下部に一つしかついていないため洗い残しが多く、一度に洗える食器も少ないタイプでした。朝晩に使用したすべての食器と調理器具をまとめて洗浄することなど到底できません。

それに対し海外では「フロントオープン型」食洗機が主流。フロントオープン型は上下それぞれに洗浄ノズルがついているため洗い残しが少なく、上下2段のカゴには想像以上に食器や調理器具を入れることができ、一気に洗いをすることが可能です。



<https://rinnai.jp/lp/dishwasher/front/>

メーカーで言うと、ドイツのミーレやボッシュ、AEGが有名で、日本でも少しずつ流行りはじめました。容量も大きく洗浄力も抜群な海外メーカーの食洗機は、時短を意識する共働き世帯の需要にピンポイントで応える商品として注目されています。ただ現在は、半導体不足の影響で入荷待ちの状況。価格も少し高めとなっています。

その状況の中、吉報といえば、国内メーカーのリンナイが製造販売を開始しました。サイズも日本の平均的なシステムキッチンのサイズに合わせてつくられており、一度に洗浄できる容量も十分。海外製にはついていない乾燥機能までついています。

この食洗機、是非チェックしてみてください。

さて続いては、【買い物・保存」と【料理】に話を進めましょう。

PART2 共働き世代にぴったり! 「家事ラク生活」のススメ②

【買い物・保存】を楽にする!

共働きで夫婦二人とも月曜日から金曜日の平日出勤の場合、買い物に毎日行くのはなかなか難しいのが現実です。買い物の頻度を減らすためにも土日にコストコなどで食料品をまとめ買いをされる方も多いのではないのでしょうか。でも肉や魚、野菜などの食材は冷凍すれば日持ちしますが、家庭用500L前後の冷凍庫だけでは容量が全然足りません。そこで活躍するのがフリーザー。今や共働き世帯の必需品と言っても過言ではありません。

フリーザー

普通の冷凍庫では、下の方に入れた食材は「掘り出す」ことが必要で、なかなか取り出すことができません。でもフリーザーなら、内部が引き出しになっているためストレスなく食材を出し入れすることができます。フリーザーは大きいものとスペースもとりますので、パントリーをキッチン横に設けるなど、間取りにも一工夫するといいかもしれません。

【料理】を楽にする!

最後にご紹介するのが料理をラクにする方法。具材や調味料をいれてスイッチを押すだけで一品できあがってしまう便利な調理家電が登場しています。

シャープのヘルシオ ホットクック

私の家にも一台あります。朝、ホットクックに食材を入れ、できあがり時間を設定しておくだけでちゃんと美味しい料理が完成します。温度センサーと蒸気センサーが火の通り具合を感知しながら自動で火加減調整し、食材をかきまぜながら調理してくれます。さらに内蓋にはドリップ加工がされており、無水鍋としても活用します。



<https://jp.sharp/hotcook/>

【洗濯】【皿洗い】【買い物】【料理】をラクにする設計・設備のアイデアをご紹介しましたが、いかがでしたでしょうか。これからもどんどん最新アイテムやアイデアが登場してくるはずですが、ご家庭のライフスタイルに合わせて「これはうちにぴったり!」と言うものを取り入れながら、毎日の「家事」の負担を減らしていきましょう。そうすることで逆に「家事」が楽しくなり、普段の生活の質もぐっと高くなるはず。それが家事ラク生活の「目的」です。

PART3 消えゆく間取り・さよならバルコニー

「家事ラク生活のススメ」でご紹介しましたが、洗濯物は「ランドリールームに室内干し」が今のトレンドとなっています。ということは、その陰で失くなりつつあるものがあります。そう、「バルコニー」です。

そもそもバルコニーの役割というと、やはり洗濯物や布団を干すための場所。そしてエアコンの室外機置き場、あとはたまに外の空気を吸いリラックスできる空間でした。

また少し前には、建物の中に組み込んだ「インナーバルコニー」が流行りました。奥行きが広く、急な雨でも屋根があり濡れにくい構造で、開放的な空間を作れる点で注目されたのです。しかしながら、今の共働き世代にとってバルコニーの必要性はだんだん薄れてきており、逆に洗濯物をバルコニーで干すことのデメリットが大きくなってきています。

「インナーバルコニー」が流行った頃は、今と比べて専業主婦やパート勤めの方が多い時代です。15時や16時には家にいて、乾いた洗濯物を問題なく取り込むことができました。

しかし共働きでフルタイム勤務の場合、家に帰って洗濯物を取り込める時間は早くても19時ごろ。冬の時期には外気の影響でせっかく乾いた衣類が湿気てしまうことになります。

布団を干すという面でも、最近ではホコリが舞って近所迷惑になってしまったり、布団掃除機を活用する世の中です。さらにベッドが普及し布団干しの役割までも薄れてしまいました。花粉や黄砂、大気汚染も深刻になる昨今、あらゆる理由で外に衣類や布団を干す習慣はなくなりつつあるのです。



そしてコスト面からも、バルコニーにとって不都合な真実がありました。実は、バルコニーをなくすことでコストを大幅に削減できてしまうのです。

バルコニーは家の外部に取り付けられる部分。雨が降れば雨ざらしですので徹底した防水対策が不可欠で、バルコニーの水平になっている上部の笠木と呼ばれる部分は特に値が張ります。

防水加工は定期的にメンテナンスする必要もあるため、インシャルコスト、ランニングコストともに費用がかさんでしまいます。バルコニーの大きさ自体を小さくしてみてもさほど費用は変わりません。

次にバルコニーを作らない場合の費用対効果を見てみましょう。

小さいバルコニーでも設置に30万円前後かかります。この費用を削減し、断熱性など他の機能向上にあてることが出来ます。インナーバルコニーを失くし、代わりに寝室を広くすることも可能です。また、外壁の総面積を減らせるため、さらにコストは下がります。

PART3 消えゆく間取り・さよならバルコニー



ただ気になるのはエアコンの室外機。バルコニーを失くした住まいでは、2階の室外機をそのまま1階部分に下ろします（3階建てはバルコニーが必要です）。伸びた室外機のダクトは外観を損なう原因になってしまうので、なるべくシンプルなダクトの配線になるよう設計時に工夫が必要です。

加えて、2・3階に配置する家具家電の搬入を考えた設計も念頭に置くべきポイントです。とくに冷蔵庫や洗濯機、ベッドに関しては室内からの搬入が難しく、一般的にバルコニーが搬入口として使われます。バルコニーを失くした場合、そういった搬入時に困難を強いられますから、引き違いの大きめの窓を設けるなど工夫を施し対応していきましょう。

以上、バルコニーの用途や費用を改めて考察してみると、ない方が想像以上にメリットが多く、思わず「さよなら、バルコニー」と呟いてしまいます。

住宅の間取りの流行りは時代や世代で変わっていくものですので、これまでの固定概念に囚われず、生活スタイルを意識した設計をしていきましょう。

PART4 空気の性質を考えた設計の工夫

2022年、暑苦しい夏がとて長く続きました。広島で観測された真夏日は何と85日もあり、観測史上最多記録とのことです（観測地点：広島市中区）。逆に冬はというと、10年に一度の強烈寒波が日本列島を覆いました。地球温暖化に起因する異常気象が増えてきていることを実感します。

また一方、電気などあらゆる燃料費も高騰しており、「快適」に過ごすための負担が急激に重くなっています。そう、家計防衛は待ったなしです。

これまで、高断熱・高气密に創エネルギーを組み合わせた快適な家づくりについて考えてきましたが、今回はちょっと視点を変え、自然エネルギーの【風】と【光】に着目した「快適空間づくり」について考えてみましょう。

まずは【風（空気の性質）】のお話。今でこそ暖房と冷房で室内の温度を調整できますが、そんな技術がなかった昔の人たちは、自然の原理をうまく使った知恵で暑さ寒さをしのいでいました。その好例が、京都の町屋です。

京都はその風土の特徴から全国的にも夏の残暑で有名な地域の一つです。江戸時代以降に建てられた京都の町屋は「うなぎの寝床」と言われ、表の店舗から奥の母屋まで一本の細長い土間でつなぎ、その間に中庭を設けるのが基本的な間取りでした。

実はこの町屋の間取りが、【風（空気の性質）】をうまく利用した天然の空調システムになっていたのです。



PART4 空気の性質を考えた設計の工夫

その仕組みはこうです。

- ① 屋間、中庭をはさむ二つの家の瓦屋根が太陽に熱せられます。
- ② 空気は暖かいと膨張して上のほうへと上り、冷たいと下に溜まるといった性質から**上昇気流**が発生します。
(上昇気流を発生させるには中庭の広さとの絶妙なバランスのもとに成り立っています。)
- ③ するとこの中庭の空気が負圧となり、小さな気圧差により屋根の上昇気流に吸い上げられるように昇っていきます。
- ④ 家の中をつながる土間を通して路地から風が引っ張られ、家の中に風の流れが生まれます。



町家の断面図

出典：朝日新聞デジタル

このように風の流れが生み出され、家全体がまるで大きな扇風機のようになります。さらに朝や夕方、路地に打ち水をすることで冷えた空気を発生させ、そのまま風の流れに乗せて室内に運ぶことができるのです。これは気化熱（液体が蒸発するために必要な熱）が奪われ冷えた空気が生まれる仕組みを利用しています。

このように先人たちは、空気の性質をうまく利用して「快適」に過ごせる間取りを考えていたのです。では、家づくりに空気の性質を取り入れた先人の知恵に習って、現代の家づくりにおける活用法を考察してみましょう。

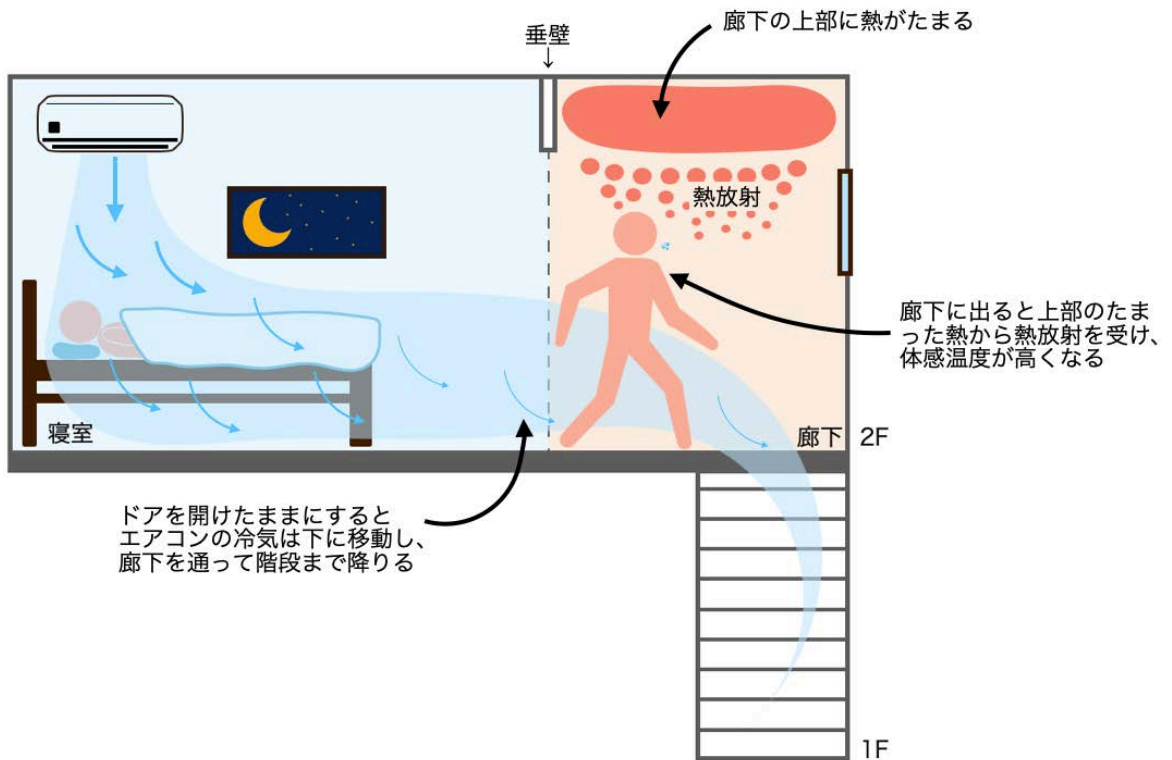
まずは活用例として、「ドアを大きくして垂壁をなくす」です。

熱帯夜が続く夏の寝室ではエアコンをつけて寝る方がほとんどですが、比較的狭い寝室では、エアコンのオーバースペックもあり体が冷えてしまう、なんてこともあります。どうせなら他の部屋も一台のエアコンで冷やせたら理想的ではないでしょうか。

しかし、夜、目を覚まして廊下に出ると、ドアを開けていたのに廊下だけ暑い！という現象が起こります。これは空気の性質上、廊下の天井近くにたまってしまいうる熱が原因です。そしてその暖かい空気を停滞させる原因が、ドア上部にある垂壁だったのです。

PART4 空気の性質を考えた設計の工夫

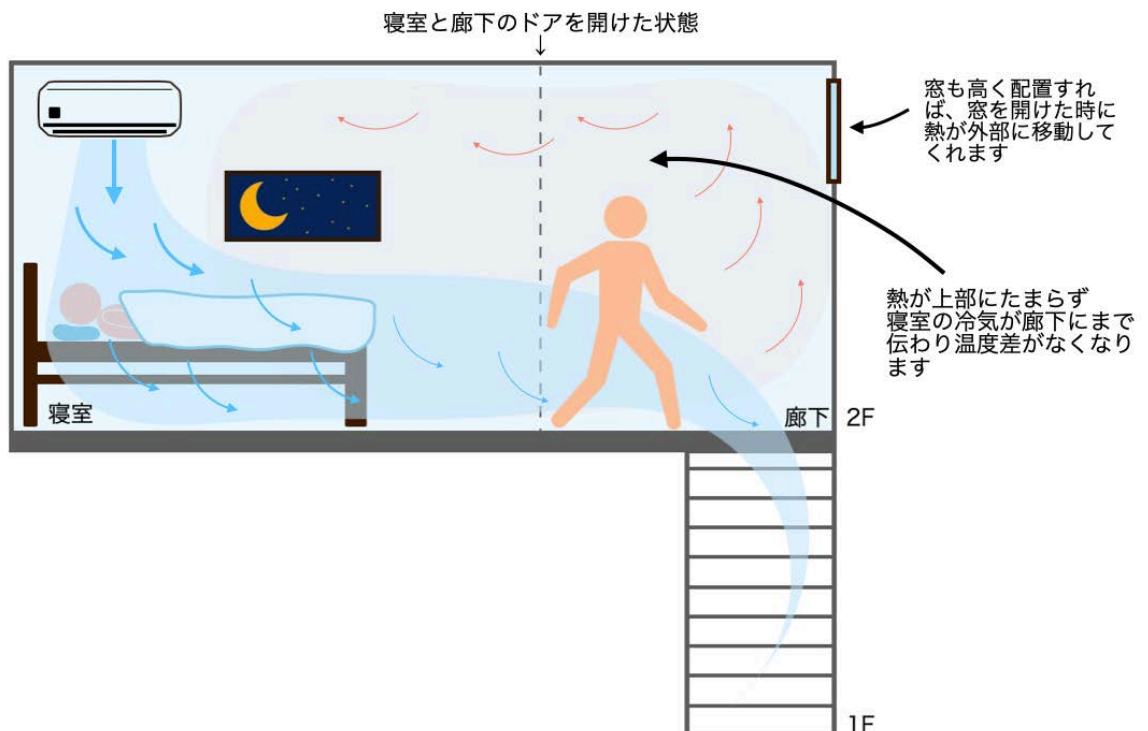
【垂壁がある場合】



空気の流れを見てみると、寝室の冷えた風は下に降りますが、暖かい空気は廊下の上にたまったまま循環していないことがわかります。熱がたまった空間は一向に涼まらない上に、廊下に出れば熱放射を受け体感温度が高くなります。

そのため、この垂壁を取り外しドアを大きくすると、廊下の上部に溜まった熱が動き出し、寝室からの冷たい空気により空間全体が冷やされていきます。

【垂壁をなくした場合】

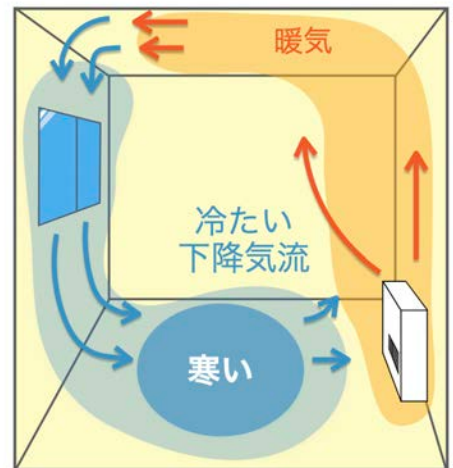


エアコンと同時にサーキュレーターの使用がすすめられているのは、溜まりやすい上部の空気の流れを変えて空気を循環させるためです。

PART4 空気の性質を考えた設計の工夫

続いて寒い冬の空気の流れについて考えてみましょう。

どの部屋も窓辺が一番寒くなり、冷やされた空気は下降気流を生み出し室内に流れ込みます。さらに暖房によって温められた空気の上昇気流に押され、冷たい空気は足元へとどんどん流れこんでいきます。**コールドドラフト現象**と呼ばれるもので、足元の冷気によって体の芯まで冷え、実際の室温よりも体感温度が低くなります。



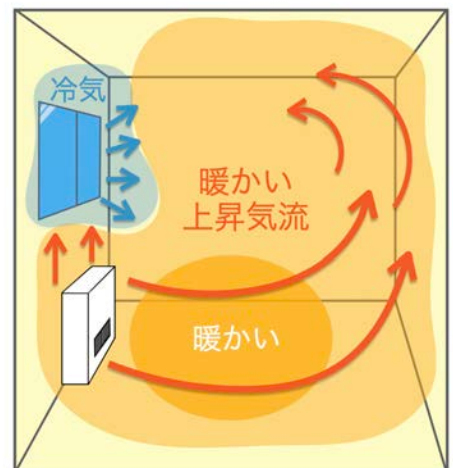
窓と反対側に暖房を置いた場合

寒さの厳しいヨーロッパの地域では、このコールドドラフト現象の対策として、セントラルヒーティング（暖房器具）を窓の下に置くスタイルが一般的になっています。空気の流れに配慮した暖房システムにより、どの部屋も温度が均一に保たれ「快適」に冬を過ごせるようです。

【セントラルヒーティング】



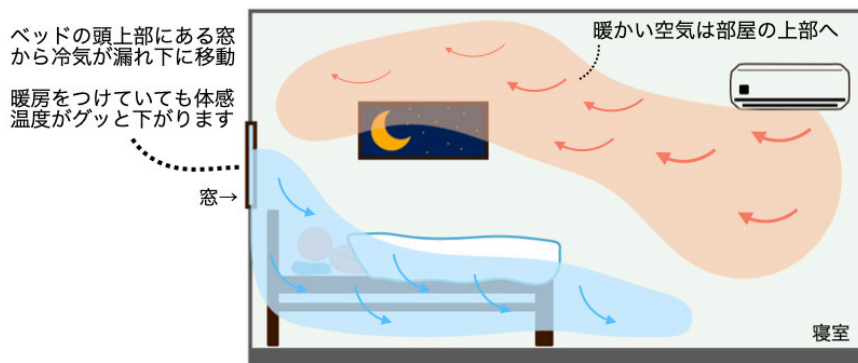
<https://kaigai.starts.co.jp/london/life/4846>



窓側に暖房を置いた場合

しかし日本の住宅では、セントラルヒーティングのような暖房器具を目にすることが少なく、しかも、ベッドの頭上部に窓を配置する寝室が多いようです。このため、コールドドラフト現象による冷えを起こしやすい間取りになっているケースが少なくありません。暖房をつけていても体感温度が低くなってしまい、寒さの大きな原因です。この現象も踏まえて、寝室のベッド・窓の配置を考えた設計をしていきましょう。

【日本の住まいでよくある寝室の間取り】

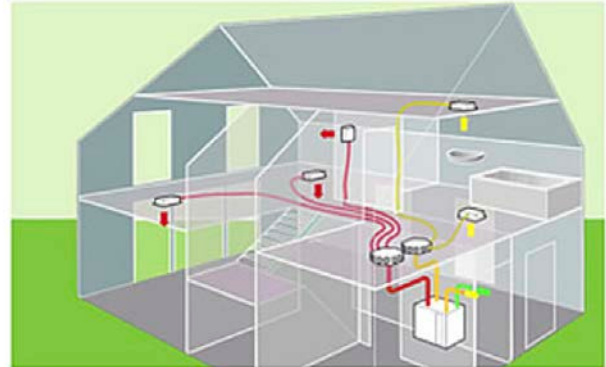


PART5 ベストな空気環境を作り出す換気システム

次に「換気システム」にも注目してみましょう。

換気とは、計画的に室内の空気を外気と入れ替えることで、自然な空気の流れでは排出されない汚れた空気を外に流すために必要不可欠な設備です。換気システムはいくつか種類がありますが、その中でも**第1種熱交換換気**は、吸気と換気の両方を機械で行う換気装置ですが、さらに給気と換気それぞれの熱と湿度を交換するため、室温を一定に保ちながら効率よく空気を循環させることができます。もちろん省エネにも繋がります。アイレストホームでは第1種熱交換換気システムとして、**スティーベル社**と**パナソニック**の2種類をご提案しています。

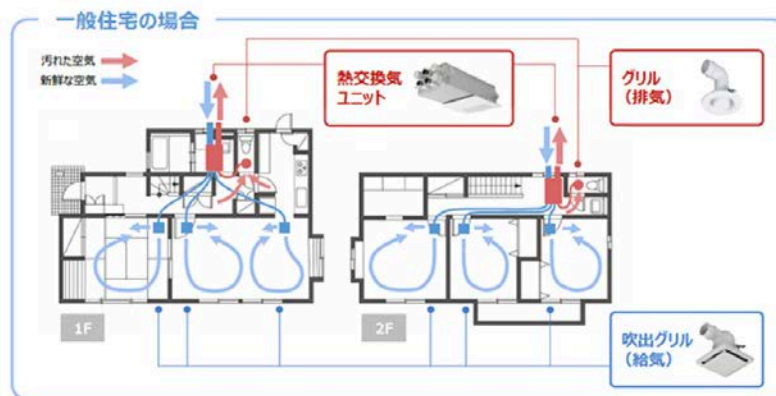
スティーベル社の熱交換換気システム「LWZ」は、環境先進国ドイツで生まれた高気密・高断熱の住宅で威力を発揮する先進の換気システムです。部屋の上部から新鮮な空気を送りこみ、家中の温度のムラをなくすことで快適を保ちます。家の壁にたくさんの給排気用フードをとりつける必要がなく、外観のデザインを壊しません。



https://www.stiebel-eltron.co.jp/products/air_conditioning/first_kind_lwz/index.html

下の図はパナソニックの熱交換換気システムですが、このシステムの違いは吹出グリル（給気）の設置場所と風向きです。普通、吹出し口を部屋の一番遠くに設置し、部屋全体に空気を送るものかと思いますが、このシステムは各部屋の入り口部分から横向きに空気を流します。つまり、暖かい空気を押し出すことで部屋の空気を循環させ、汚れた空気を廊下に押しやった上でかき集めています。そして廊下に天井の換気扇によって吸い取り外に排出します。

第1種 全熱交換形 換気システム



<https://sumai.panasonic.jp/air/kanki/kodatekicho/>

どうでしょう。空気の性質を理解し、空気の流れをうまく活かした間取りや設備の設置で快適さが随分変わります。ただ現在は、京都の町屋のように自然な外の【風】を室内に取り入れるだけでは「快適さ」を生み出すことは難しくなりました。それは**デグレーダー**という各地域の寒暖の指標にも現れているように、年々暖房・冷房を必要とする時期が長くなり、窓を閉めて生活することを余儀なくされる気象環境になってしまっているからです。

さらに最近では、“窓”自体をほとんどなくしてしまう家も多くなりました。共働き世帯にとって、昼間に窓を開けて換気をする習慣が減ってきたという実情も関係しているのかもしれませんが。

「さよならバルコニー」に続き、「さよなら窓」となってしまうそうですが、窓には換気以外の重要な役割があります。次回は「忘れてはいけない窓」の役割」と題して、太陽の熱を室内に取り込む効果について話します。

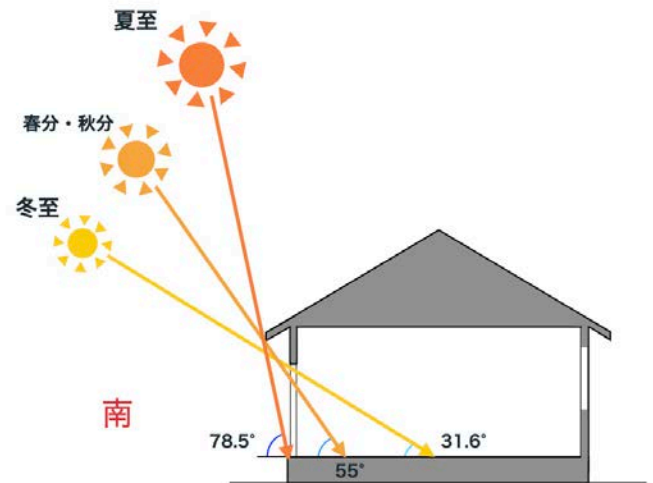
PART6 太陽光の熱を最大限に活用する”窓”

暑さが厳しかった去年の夏、私の家では朝夜を通してリビングの冷房をつけっぱなしで過ごしました。電気代が高騰しているのでさぞや高額な請求が・・・と思いきや、さほど多くはありませんでした。というのも、高气密・高断熱にこだわって建てましたので、外気温に左右されず、冷暖房にかかる負荷を抑えつつも快適な温度が保たれたおかげです。もちろんですが、”窓”は閉めたままの生活です。

このことを考えると窓の必要性に疑問も感じてしまいます。実際のところ、冷暖房にかかる負荷を削減できる高气密高断熱な家が増える中、気密性を損なう”窓”の需要は失われつつあります。”窓”を開けて換気をする習慣が減っていることやコストがかかるといった様々な要因も重なり、新築戸建て住宅の”窓”の数は減ってきているのです。

とはいえ忘れてはならないのが、”窓”は室内に【光】を取り入れる重要な役割があること。【光】は室内に明るさを取り込むだけでなく、冬の住まいにおいては太陽の熱を取り込み室内をあたためる働きがあります。でも夏だと逆に室内温度が高くなり過ぎてしまいますので、取り込み方を変えなければいけません。そのことを踏まえ、住まいに【光】を取り入れる”窓”のちょっとした設計の工夫をご紹介します。

まず南側の”窓”を設計する際、軒の長さや周りの環境（隣の家との距離など）との兼ね合いを考慮して、夏至、冬至の太陽高度でどのような光の差し込み方をするか検証してみます。夏は直射日光の取り込み量を減らし、冬はできるだけ多くの太陽の光を取り入れたいところです。夏至の太陽高度は78度、冬至の太陽高度は31度程度ですから、それぞれの入射角を図面に記すことで季節の変化による日の差し込み方を明確にしていきます。



窓ガラスを通して室内に太陽の光を取り組むことを**日射取得**といい、南側の”窓”は冬にどれだけ多く日射取得ができるかが設計の肝です。日射取得を最大化できた場合には、その暖かさは800wストーブ3つ分相当にもなります（窓の熱貫流率などから計算）から、暖房にかかる負荷を低減できるのは明らかです。

しかし、冬の日射取得のために大きな窓を設けるとその分夏はどうしても強い光で熱が取り込みやすくなるため、ひさしやアウターシェードを利用して**日射遮蔽**の対策を必ず行いましょう。



出典：YKKAP

隣の家との距離があまり取れない土地では、1階部分に冬至の光をどうしても取り込めない場合がよくあります。そういったときは、隣の家の影響を受けない2階の窓から光を取り込むために「吹き抜け」をつくる設計をご提案します。「吹き抜け」をご希望されない場合でも、冬至の入射角が入る位置まで2階部分の高さをあげてしまうことで光を取り入れるといった工夫も可能です。

PART6 太陽光の熱を最大限に活用する”窓”

次に北側の”窓”は**昼光利用**を意識して窓を配置します。昼光利用とは、太陽の光をうまく利用して室内を明るくする機能のことで、北側は高い位置に窓を配置して、常に安定した明るさが室内全体に入り込むよう設計します。

最後に東西の”窓”は極力小さくするようにしましょう。とくに強い熱を持つ西日は夏の冷房にかかる負荷を増やしてしまうため、西日の侵入を防ぐひさしを設ける工夫ができます。他にもすだれで日射をコントロールするなど、日射遮蔽のちょっとした工夫が冷房にかかる負荷の軽減につながります。

では太陽の光を入れるなら天窗は？との考えもありますが、天窗は屋根の断熱性能を大きく下げた上防水が心配です。雨漏れのリスクにもつながり、太陽光発電のパネルの設置面積を狭めてしまうのであまりおすすめできない設計ともいえます。

以上のように”窓”の配置では太陽の入射角を考え、夏も冬も、東西南北どの方角からも【光】が有効的な働きをするような設計が必要です。

他にも太陽の【光】の熱を「**蓄熱**」することで、冬におこる昼夜の温度格差を減らし、暖房にかかる負荷を軽減する方法もあります。温熱機能のあるレンガやコンクリートの壁を太陽の日があたるところにつくってみたり、サンルームの下に砂利を敷くなどちょっとした工夫を加えるだけで、昼間の熱が温存され夜の間も暖かさを維持することができるのです。

これからの住まいでは高気密高断熱を基盤にし、ご紹介した自然エネルギーの【風】や【光】を有効活用する住まいの設計＝**パッシブ設計**をより積極的に取り入れていきます。夏涼しく・冬暖かい「快適」で省エネな住まいの設計が、地球にも家庭にも優しい家づくりに大きな力添えをしてくれるのです。